



Title	2019年「臨床心理発達相談室」活動報告：2. 修了生の近況：相談室の学びからおがる就労前支援プログラムの活動へ
Author(s)	塚本, 由希乃
Citation	臨床心理発達相談室紀要, 3, 77-80
Issue Date	2020-03-27
DOI	https://doi.org/10.14943/RSHSK.3.77
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78515
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_2434-7639_3_77-80.pdf



2019年「臨床心理発達相談室」活動報告

—2. 修了生の近況—

相談室の学びからおがる就労前支援プログラムの活動へ

塚本由希乃* (2013年度修了)

1. はじめに

私は、2013年に修了し、現在は札幌市内の発達障害者支援センターで相談員として勤務している。センターは、発達障害の診断の有無を問わず、また全年齢を対象とした発達障害（傾向）のある方の相談、そして、地域の支援者向けのコンサルテーション等を行なっている。

今回、修了生の近況報告というテーマを頂き、当センターで行なっている、発達障害のある方への支援モデル（事業）における、“青年期の発達障害のある方向け、就労前プログラム”の活動報告をしたい。

本プログラムの実践含め日々の臨床実践では、北大大学院臨床心理学講座での学びが大前提にある。活動報告を通し、北大での学びの何が現在の対人支援の仕事に生きているのか、中でも特に重きを置いている点を整理できたらと考えている。

2. プログラム実践に至る経緯

北大教育学院終了後、札幌市内の社会福祉法人に就職、就労支援関連事業に3年携わり、その後、現在のセンターで就労支援を担当し、今年度で3年目になる。発達障害の就労支援における課題として、就労定着の難しさについての課題が言われているが、就労を継続していくためのスキルを教えるには、一定の工夫が必要であることを感じている。一方で、発達障害傾向のある学生の就労支援に関する課題も、ここ数年の間、地域の研修会や国内の学会等でも取り上げられている現状があり、国全体で支援や対応の必要性が高まっているものとする。当センターで、この2つの課題への対応を考える中で知ったのが、今回、プログラムの参考としたT・STEP（TEACCH School Transition to Employment and Postsecondary education）だった。

上記のような就労支援の課題は、アメリカにおいても同様に言われてきており、ノースカロライナ大学TEACCH部では、社会適応を難しくしている理由として、スキルの未学習があることを前提に、T・STEP（発達障害傾向のある学生向け就労プレプログラム）を開発した（ローラ・クリンガー、第26回日本LD学会～発達障害の人が大人になって幸せになるために～、2017）。現在も、プログラムの実施と効果検証を繰り返し行なっている。

3. 取り組みについて

2019年7～12月の期間で、札幌市内にある、おがるコンサルテーション先である、生活訓練事業所にて、対象者4名に対し、上記T・STEPを参考に、おがる就労前支援プログラムを施行

* 札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる

した(*1)。対象は、19～28歳の男女で、発達障害の診断の有無については様々である。共通して、就労に向けた課題がある者である。プログラムの前には、本人アセスメントとして、またプログラムの効果検証のため、フォーマルアセスメント、インフォーマルアセスメントを数種行っている。

プログラムに関して、要点をしばって紹介する。プログラムは、就労生活を支える基盤として、4つのキースキル（感情コントロールスキル、実行機能スキル、社会性/コミュニケーションスキル、目標設定スキル）で構成される。今回、プログラムは全18回として設定したが、回ごとに、それぞれのキースキルをさらに具体的なスキルとして設定した（例：人にヘルプを出すスキル、効果的なストレスの対処法、効果的な修正フィードバックの受け入れ方など）。練習のサイクルは、彼らの学びやすさを念頭に、テーマに関する全体セッションの後、個別セッションを行い、その後、インターンシップ先や自宅、友人関係など実生活の場でそのスキルを練習するという流れで設定される。そして、その結果を次のセッションで振り返ったり、また新たなスキルを学習するという流れである。プログラムでの教え方については、彼らの学びやすさに合わせたツール（ルーティーン学習や、ビジュアルリマインダー等）を紹介、認知行動療法やソーシャルナラティブ等、実証されている教え方を採用しているのもT-STEPの特徴の一つである。

4. 取り組みを通して

本プログラム実践における重要なポイントはいくつかあるが、個人的に、臨床実践において大事に思う要素が多く含まれていると考えている。中から3つ紹介したい。

一つ目は、臨床実践では基本ではあると思うが、アセスメントに基づくことである。発達障害のある方の場合、特に、その特性や学び方は一見でわかりにくいいため、何が得意であり、何が苦手か、アセスメントに基づいて、関わり方や教え方を工夫していく必要がある。支援の中身として、対象者の必要性や受け取り方に合っているということが、支援として前向きな成果に繋がると考える。本プログラムでも、フォーマルなアセスメントとしては、ウェクスラー式心理検査やAQ等を実施、加えて、スタッフからの聴き取りや行動観察に基づき、おがる支援計画パッケージ“みらくる”による特性やスキルをアセスメントした(*2)。

二つ目に、本人を尊重するという考え方が大前提にある、支援プログラムである点である。スキルの一つである目標設定スキルは、彼らが経験を得にくい自己選択・決定を支援する一つの有効な方法であると考えている。具体的には、自分で立てたゴールとそれに向け必要な行動、そして実際に取った行動とその結果などをスタッフと共有し、視覚的に書き、振り返りをしながら進めていく。個々にペースはあるものの、当初は難しかった着想や計画立てが少しずつできるようになる様子を窺い知ることができた。また、プログラム終了後の彼らの言葉としても、「目標を文字に起こすことで具体的になって、達成感につながっていた」、「やらなきゃと思っていてもできなかったことが、毎回個別セッションでの振り返りで、次どうしようというところも一緒に考えてもらえるので行動を達成しやすかった」という言葉が聞かれた。支援者として、彼らの意思を尊重していくためにも、学び方の違いがあるという視点に立ち、本スキルに焦点を当てる意味（選択や決定には、練習が必要な方もあるという発想）を再確認することができた。

三つ目は、効果的なプログラムは、多くの人が実施できるべきであると考えていることにある。T-STEPの構成要素は、エビデンスに基づいた教え方を採用していたり、T-STEP自体も効果検証を繰り返し、一定の効果を報告している（ローラクリンガー,2017）。余談にはなるが、私が大学院に入ったきっかけは、大学院入学以前に障害のある方の発達支援をしており、そこでの知識不足を感じたからである。同時にその知識を埋めて支援を行うときには、人に説明ができる支援をしたいと考えてきた。一貫しない支援は、支援を受ける側・する側両者にとって、ともに苦勞する状況を見てきたこと、そして、良い支援であると思うのであればこそ、見える効果を示し、周囲・社会にも拡げていけたらと考えるからである。本プログラムも実施・実施後には、効果検証のため、各種フォーマル検査を行っている。本論では趣旨から逸れるので具体的には触れないが、検査結果の数値からは、プログラムについての一定の効果が示されていると見ている。終了後のプログラム参加者へのインタビューにおいては「ストレス対処をメモリで表すことは知らなかった。数字で表すことっていいなと思った」「（プログラムのスキルは）普通では教わらないことだと思った。苦手なことだったので学べてよかった」等という言葉が聞かれた。彼らのこういった感想にも、エビデンスで構成されるT-STEPの効果を垣間見るところである。

5. 終わりに

臨床実践をしていく中で、心理士の仕事は、カウンセリングだけでなく、アセスメントの専門性の高さも求められていると改めて感じている。今回のプログラムで大事な要素の一つである、アセスメントの知識は、北大での講義、実習なくしては得られなかった。現場に出ると、とても具体的で専門的な学びであったと再確認する。もっと学んでおけば良かったと思う部分もあるが、今後も臨床実践を通し学んでいきたい部分である。二つ目の臨床の姿勢に関してだが、これも当然のことではあるが、心理士の仕事は、相手の方が中心である。ただ、その中心というのがどういうことなのか、相手の方が中心であるために、自分がどのようにあれば良いのかということについては、講義・実習を通して何度も、また体験的に教えていただいたと感じている。そして3つ目に、これは修士論文の作成を経てであるが、自分が行っている実践について、自分と相手で完結するのではなく、社会的な意味を考えながら行っていくことが重要であり、そのためにも、人に説明できる支援の方法を考えていくことが必要だと感じる。効果を示せるプログラム作りには、ノウハウ含め、修士論文作成の過程があって知ることができたと考える。

日々の臨床場面では、カウンセリングのこと、記録の取り方、心理支援をする本質的な意味まで、先生方お一人お一人の顔や言葉をふと思い出すことが多い。講義で学んだ知識ももちろんだが、やはり実習（相談室実習、面談の実習など）の中で学んだことは、言葉で説明できること、感覚的なこと含め、全てが体験的学びになっているのだと考える。仕事をする中で、これほど学んだ時をありありと思い出す職種はないのではないかと思う。

だからこそ、現在いる院生の皆さんは、在籍中の学びには、常にアンテナを張りながら、現場実習、相談室実習、講義の間や先生との会話など、今しかないと思って、多くを吸収されると、必ず糧として思い出されることとなると思う。

<参考>

・ローラ・クリンガー，2017年第26回日本LD学会～発達障害の人が大人になって幸せになるために～発表

*1：T-STEP（（TEACCH School Transition to Employment and Postsecondary education）はアメリカノースカロライナ大学で実施・効果検証が行われているプログラムである。プログラムを参考にした本モデルの実施については、TEACCHの公認実践者の資格のある者と一緒に行っている

*2：“みらくる”は、札幌市自閉症・発達障害支援センターおがるが独自で作成している支援計画パッケージである